

白鳥鼎三の『天籟菴語録』について

川 口 高 風

明治期の曹洞宗は、国家の新体制とともに新しい宗制改革がなされ、近代曹洞宗教団の確立を形成した時期である。そして、明治七年三月に曹洞宗としての宗名呼称を期とし、両本山東京出張所を曹洞宗務局と改称して、全国末派寺院へ布達が出された。また翌八年十一月には、両本山貫首交替の時に、後董は公撰投票によることが決議され、

同十二年九月の総持寺貫首奕堂禪師遷化後、その規程による最初の投票が行われた。ここに、後董候補者をあげれば、青蔭雪鴻、在田彦竜、畔上楳仙、浅間俊英、濤聰水、忍大薩、白鳥鼎三、滝谷琢宗、滝断泥、辻頭高、長森良範、西有穆山、能仁柏巖、服部元良、平川肯庵⁽¹⁾、福山堅高、南木国定、森田悟由ら十八名があげられており、当時の碩徳の名を知ることができよう。この外、明治期に活躍した碩

徳は他にもあげられるが、宗門の人物史を顧みると、先師を追慕する方法として、遺弟や随徒により先師一代の法語をまとめて上梓することが多く、またそれは、遺弟らに課せられた仕事でもある家風が残つており、特に明治、大正期には盛んに行われ、今なお語録、あるいは広録などによつて、碩徳の宗風を知ることができる。

ここに、例としてとりあげた碩徳の中にも白鳥鼎三、滝谷琢宗、西有穆山、森田悟由の語録をみるが、鼎三の『天籟余韻』は、明治二十七年三月に鼎三の随徒であった高取祖中（淨元寺（名古屋市昭和区村雲町）七世）によつて刊行されたもので、明治期になつて刊行された先師の語録では、最も早い刊行書である。そして、その出版届の控が宝昌寺（海部郡大治町花常）にあり、

白鳥鼎三の『天籟菴語録』について

白鳥鼎三の『天籟庵語録』について

出版御届

一天籟余韻 西洋仮綴 全壱冊

右高取祖中ノ編輯セシモノニシテ白鳥鼎三
遺稿詩文章ヲ記載シタルモノ今般出版候
条製本式部相添此段御届申上候也

編輯兼 発行人 高取祖中

製本式冊郵送

三月十五日 印刷

三月廿二日 出版

これによつて、祖中は内務大臣井上馨へ『天籟余韻』を一冊送つてゐることが明らかになる。

さて鼎三は、明治五年九月の太政官第二六五号布による

僧侶に苗字を設ける際⁽²⁾、住持していた白鳥山法持寺（名古屋市熱田区白鳥町）の山号白鳥をとつて俗姓となし、諱は即一、号は鼎三、または天籟庵とも称した。鼎三は、明治期の碩徳として高名であり、略伝などを別稿で考察したのでそれに譲り⁽³⁾、ここでは語録の『天籟余韻』の内容をみると、最初に鼎三の肖像があり、引続いて参学徒の佐々部喬松に

よる略伝、嗣徒江崎接航の附言、それに続いて本文が上堂小參部附示衆、賀偈疏序部、贊銘題画部、拈香法語部、下炬度鑊部、贈酬雜詩部の六部に分れ、最後に嗣徒大島天珠らの跋偈を所収している。そこで、接航の附言をみると、斯遺稿者天籟老師曾住觀音福寿黃龍白鳥秋葉之日或拈香或贊題者也航嘗侍巾瓶幾多年常毎聞老師之拈挙便錄之紙衣隨其揮毫仍命之管城間親就師請之雖黃以囊藏久矣然而航也晚後因事東西萍泊不得常侍膝下故不能悉皆筆記之者實為遺憾今也老師戢化修齋之日法眷偶自鎮西越北來會幸哉共謀欲修其遺稿頒之于法弟及隨從衆徒以報恩海涓滴各出或手沢或箇秘補其欠錄以充編輯於于此偈頌銘贊等得若干篇恨猶有遺脫須讓拾遺今分部門略為一卷以命活字名曰天籟余韻乃用手稿之自題也

嗣徒 江崎接航謹誌

とあり、『天籟余韻』は、鼎三がかつて住持した觀音寺（西春日井郡師勝町六ツ師）、福寿院（名古屋市中区大須）、黃龍寺（名古屋市南区呼続町）、法持寺、秋葉寺（静岡県周知郡春野町領家）における拈香法語や贊題を接航が中心となり、法弟や隨從衆徒の箇秘などからまとめたもので、本題は鼎三手稿の自題であることも明らかになる。だが、『天籟余韻』

には刊行年月日の奥付のないものもある。その表題には、

白鳥鼎山老師遺稿

天籟余韻 全

とあり、明治二十七年三月刊行本とは異なった構成順序で、贊銘題画部、贈酬雜詩部、賀偈疏序部、拈香法語部、下炬度鑊部、上堂小參部附示衆となつてゐる。しかも拈香法語部において、法語の順序が異なつた箇所もみえ、さらに鼎三の肖像、佐々部喬松による略伝、接航の附言、跋偈もない。しかし、版は明治二十七年三月刊行本と同じであり、永平寺史編纂委員吉岡博道氏の御示教によれば、静岡県下で時々拝覧するとのことであり、鼎三が住持した秋葉寺関係者によつて再刊されたものではなかろうか。なお『天籟余韻』の名は、尾張の儒学者で、漢詩に秀でた市野天籟⁽⁴⁾の『天籟余響』乾坤（明治三十一年四月 玉潤堂）の旧稿（嘉永年間）による影響も少なからずあつたのではないかと思えるが、それについては不詳である。

ところで、『天籟余韻』の各部をながめてみると、上堂小參部附示衆は晋山上堂、小參、拈則、示衆の四部からなり、計七十一種の法語がある。その中の晋山法語には、觀音寺、黃龍寺、秋葉寺における法語もあり、また觀音寺

（名古屋市西区児玉町）、照空寺（岐阜県本巣郡本巣町文殊）における晋山法語の代作も所収してゐる。賀偈疏序部は、祝賀偈が八十一種一二三首、疏は四種四首、序は八種十一首ある。贊銘題画部は、題画や画贊が二〇六種三四六首、銘は四種四首、聯額が四種四首あり、自画贊は十首あげられてゐる。拈香法語部は仏生会、涅槃会、永祖忌をはじめ諸寺の開山や歴住などの年忌法語や施餓鬼会、開眼供養などの法語が二〇六種四七一首所収してゐる。下炬度鑊部は奠湯、奠茶、秉炬師としての香語があり、僧関係八首、在家十五首の二十三種ある。贈酬雜詩部は、年頭や來訪客に対し贈つた偈二七五種三二九首を所収してゐる。

このように、『天籟余韻』は鼎三の詩偈の博学さが明らかになるとともに、鼎三伝研究の根本資料たるものであることも明らかになるが、私が見出した蓮覺寺（静岡県磐田郡竜王町中島）所蔵の『天籟雜語錄』乾と『天籟菴語錄』坤は、『天籟余韻』編集の際、接航などは参照しなかつたようと思える。それは、例えは『天籟雜語錄』乾の晋山部引上堂小參部に法持寺の晋山法語を記してゐるが、『天籟余韻』ではなく、また『天籟雜語錄』乾の和歌之部が、『天籟余韻』には全く所収していないことをはじめ、各部

白鳥鼎三の『天籟菴語録』について

には『天籟余韻』にないものが多くあり、また逆に、『天籟余韻』に所収しているがない香語もみえ、したがつて各部を対照してみれば、

天籟雜語録 乾(外題)	天籟余韻
天籟菴雜稿(内題)	
晋山部引上堂小参部	上堂小参部附示衆
成道忌法語部	拈香法語部
天籟庵 香語部	拈香法語部
香語部	拈香法語部
題讀部	贊銘題画部
詩法輪部	贈酬雜詩部
転法輪部	上堂小参部附示衆
賀偈部	賀偈疏序部
秉炬部	下炬度鑊部
拈竹部	上堂小参部附示衆
文銘部	贊銘題画部
和歌之部	
天籟菴語録坤(外題)	
天籟老人語録(内題)	

では、『天籟雜語録』乾と『天籟菴語録』坤の編集した人を考えてみると、成道忌法語部、香語部、題讀部、詩部、それに『天籟菴語録』坤に侍者慧印、門人慧印となり、また賀偈部、文銘部には「侍空録」とあって、随侍した慧印と□空(不詳)であることが明らかになる。慧印とは、蓮覚寺二十二世証契慧印のことと、万延元年(一八六〇)秋、鼎三に随侍して以来、慶応二年(一八六六)冬には

鼎三について立身しており、鼎三の下で著書や語録などを書写し、それを『袖裏金鏡』と題して秘蔵していた。そのため、『天籟雜語録』乾の包紙上にも「袖裏金鏡 参」とあり、また「維時慶応竜舎柔兆撰提格大呂写於神跡峰下」とも記されている所から、立身した慶応二年冬安居の十二月に、神跡峰すなわち法持寺において編集したことが明らかになり、『天籟雜語録』乾は、慶応二年十二月以前の鼎三の語録といえる。だが、『天籟余韻』編集の際に、接航は慧印編の『天籟雜語録』乾と『天籟菴語録』坤を参照したか明確にいえないが、対照の結果からすれば、参照して

いなかつたようと思われ、また『天籟余韻』を、明治二十七年十月二十五日に法持寺住持の大島天珠より贈られてはいるものの、直接の編集には携わらなかつたようである。したがつて『天籟雜語錄』乾と『天籟菴語錄』坤により、『天籟余韻』以外の鼎三の語錄が明らかになり、さらに鼎三伝研究の上にも新しい事実を加えることができ、新資料として翻刻する意義も大きいもので、ここに紙数の都合で、『天籟菴語錄』坤のみを紹介してみよう。

註

- (1) 明治十二年九月二十八日の宗局布達第二十号による。
- (2) 伊達光美『日本宗教制度史料類聚考』(昭和五年四月
巖松堂書店)六二二頁に、原文がある。
- (3) 拙稿「白鳥鼎三と光明藏三昧」(昭和五十四年六、七月
傘松第四二九、四三〇号)。
- (4) 市野天籟については、『名古屋市史』人物編第二(昭和九年五月 川瀬書店)三五四頁に略伝があり、『天籟余響』についても記されているので参照されたい。
- (5) 蓮覺寺に『天籟余韻』と天珠よりの進呈書があり、それを記すと、「遠州豊田郡十束村 蓮覺寺 鷹野証契殿へ進呈 尾張国熱田駅白鳥山法持寺 大島天珠贈 明治二十七年十月二十五日午後出ス」とある。

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

天籟菴語錄 坤（外題）

天籟老人語錄

門人慧印編

来稀

小参釣語

解制
雖結三冬護鷺冰春來脫縛一枯藤落花流水無心境翻袂東西南北僧

大雲乘仙上座度鑊

正月既望円寂徒

十八年間俗与僧雖然是夢也風流睡醒苦樂邯鄲路開眼松風一枕頭名入心操醒卑氣鋒溫柔非禦寒於方袍志脫塵界非遁飢於円頂混身繙流似學黃鸝幽谷々口遷喬木如乘白雀柳城々外解仙遊如上上座十八年來夢中說夢底且道夢覺一如自由大乘山風流雖然臨行一着奈何說自由喫春風徹骨雖春淺柳綠梅花画錦優

題書画帖

泉石烟霞屬筆端無邊風月伴清閑雅情恰似咬甘蔗本末何論一望間

茲前有福田卓杖和尚就于大谿鄉万年山玉泉禪師新成法幢刹且使嗣子達宗力生提斧住山予也隨喜之余綴一律以賀悃云

玉泉憂玉万年山流菜認師開法筵達道不論提斧話超宗豈問踢瓶緣叢林增翠尾州地祇樹抽芽首夏天勿怪福田衣浦客香雲蓋覆大谿邊

仏誕生忌

昨朝雨是天甘露令日晴為淨法身耐笑捧頭兼杓柄有長有短費精神

賀七十寿

春秋忘却是兼非豈逐世華如蝶飛延壽術因安逸志忽言七十古僻病睡魔雖已降貧家只欠讀書鉤夜來不用穿隣壁殘月移梅上希窓

希窓

題夏山

夏日多清味何知苦熱煩閑亭甘蔗境本末與誰論

春江院越山良宗和尚肖像贊

靠壁鳥藤嚴法令豈拈白払欺賢又ハ 聖風烟不礙大高山掛在春

江一円鏡喚信衣伝得搭肩頭越格宗風誰有靜

渡唐天神

梅花爭雪傲霜腸不歷歲寒不敢彰曾自經山放清白一枝玉蕊到

今香 得中玄旨和尚征月

連日雨逢又風逢回頭元是一真空如知六月薰風味玄旨何為有

勺中

永祖六百年塔銘

雖類無縫塔豈擬隨淚碑永平空手眼突出與人知

普同會香語 施主橋中山田氏

碧水洋洋々西又東遠離人境稱橋中世間雖有炎蒸苦到此皆云熱
氣融喚向外休求甘露味自家床上滿盤豐

唯有一乘沙弥度鑛

從來憐子打癲狂却好癲狂入道場世出世間無樣兩茫茫業識本
家鄉名入風容巍々眼目堂々雖無丈夫心具有丈夫之德相本非
僧伽志贏得僧伽行裝長者子而姈嫋自國他國風癲漢而接取花

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

街柳城看々四年來入龕入細仏魔界底作活計若汝到這裡試
打風癲去則魔界元非魔界仏界豈是仏界煩惱菩提一箇遊戲場
喚六月薰風吹熱惱光明殿裡又清涼

竜海奕堂禪師贊

雲居艸座箇々俺洞三界無賴伶傳何窮喚庸鞋竜枝乾坤窄冷口
喫余鉢裡空

前蓮覓百城南禪師壽像贊

百十城南有此師單提獨弄立生涯是非靠倒一藤枝須逆看過双
眼眼皮履面前脫幾歲信衣肩上披多時如向外峯相見了忘知說
嘿含機宜

偶成

古今價貴陳蒲鞋不是知音人不知要養道元功德母嶮巇平坦總
吾師

示衆

白雲自有白雲色綠水豈無綠水声聲色外邊如転步一蒲團上不
生生

天籟菴偶作

法界虛空為一庵不閨風雨與烟嵐等閑坐了渠兼我宗乘任他一
二三

二八善神贊

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

了了了時無可了玄々々處有何玄甚深般若波羅密兮付兒孫作

福田

茶

陸羽滿餅味趙州一室施只要忘渴仰何說淡濃為

偶作

水月橋辺水月秋水光月色共悠々我心如水還如月々落水流々

不流

巨窓全量大姉沒後煩類家因而設齋法語 於本鄉長福寺
苦界樂邦一念強回光念々本家鄉恁麼落々灑々去便是安心第

一方 縱點破恁麼去猶是漸時岐路畢竟如何諦得去 更聞一

卷普門品処々心身千万彊

夏日偶意

陳年故屬曾無用今日新條亦頓忘見說蓬萊風色好返看坐了一

繩床

蓮覺開祖忌 并引

東奔西走因投茲場不図今晡相值當山開闢始祖安雌全雄大

和尚正当示寂正辰拈一穗香以供涅槃之真相云曰

生前有雌伏末後要雄飛誰識安行履全身任所帰

神跡嶺無緣塔銘 此銘元仏説也集者誤具者也

衆生國土同一法性地獄天宮皆為淨土有情非情齊成仏道

禪岳文宗上座下火

苦海樂邦行脚躬翻身不妨探西東人間毒熱要廻避憐汝錯投於

水中

蓮船觀音

大悲回顧受人天一葉舟中慈力全万里清香吹不尽微風相送白

蓮船

傘

或時伸亦有時縮受用縱橫該十方非但呵風罵雨去人々腦後癡
円光

對月

雪晴風止月明円孰是了知經典禪物外翻身沒蹤跡拳頭殘月在
深川

蝶

友是遊蜂食是花春風影裡送生涯一飛一宿乾坤闊処々芳園皆
吾家

漁人子水死

十六季間不繫舟東西南北信漂流一朝櫓折撓碎後月白風清古

岸頭

大施餓鬼 三首

亡魂今日出來迎雨露共落陽棚懸得燈明天上月松風流水諷經

声供

松林山入寺小參釣語

地盛香千峰雪天雨醍醐四海泉亡女独非飽法昧群生同会結勝
緣飯

秋風吹過度疎松一味清涼驀地供法界回頭法甘露未傾早是滌

心胸

築坂山

勿怪閑僧不得閑工夫費作小溪山客來同愛未曾識在世間而離

世間

永祖忘迎聖點眼

拈一枝毫時一點一双心眼一時開不好五百年間聖六百年強又

拈來

同禹中

秋雨欲晴猶未晴應須天帝引愁情只堪胆札不堪述脫落身心活

眼睛

松音開山道淵本成禪師迎聖點眼

生滅去來雙眼睛乾坤宇宙一禪牀毫端點墨要拈得却被兼身射

日光

同十七周忌退夜獻湯

福田自有熟秋梁木鉢曾無帶菊香秋梁熟與未萌菊攬點将来一

味湯喫黃昏乘月也無影明々十有七年強

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

這箇有一閑若人透得來者許三十棒試通消息來 酒云

不問透閑未透閑松林風月趣千般山中勿道無滋味滿殿微涼洗

肺肝

梅贊

精神元是仙党物玉骨清姿自異風為愧百花叢裡觀淡香暗友画
圖中 儂為仙看者回改之

達祖半身図贊

欲識全軀不得描少林片月影無聊九年曾未見双脚勿怪半身入
我朝

出山像贊

我聞隱者不尋山漫弄金輪入雪山今也出來岩下路虛空依旧是
銀山

同

欲救一切衆生苦端坐六年忘我身是日写來桂檀上却抱慚愧笑
闇々

同

一回拍手笑闇々錯喫六年閑苦辛一見明星無別事眼橫鼻直旧

時人

三面大黑天贊

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

一体三面相見了三不為多一何少衆生帰向願心深得福來兼慧
眼瞭

自贊

非色非空無相々兮明露出不曾歲寒林々下老梅樹冰雪精神鉄

心腸

成道忌 三首

六日眼睛八字開見星今曉着沙來雪山未上有消息旧路抽枝臘

月梅

六年端坐雪花堆枯木三冬春不回大地一團寒徹骨老梅依舊曉
來開

雲有嶺頭閑不徹水流岩下太花生即見如來非相々悔以仏法落
人情

本師松岩大龍洞悟老和尚受業師宝林天嶺大和尚法幢師

東昌良宗大和尚三真一軸之肖像應具融仙峰力生之請書
本為今庭受業親一円光裏寫三真銘肌花錦潤藍語仰礼大龍堅
固身

田家秋晴

晴成愁雨又成愁豈為耦耕作自由農父不知方外客夜。月伴吟
遊來迎

扇子書之 二首

熱時徹骨徹心熱寒到普天普地寒扇子一揮還自笑到頭何處不
清安

炎天六月幸施工一味清涼起手中無處不周風性力初制因我動
搖功

春曉早發

醒月眠花養野生林泉便是適迷情春來早起無他事要聽晚鶯第
一声

新竹成林

人生仮有稱竜孫厭雨愁風惱屈魂新竹却憐抽古竹凌雲志操自
令存

夏日偶作

強要弘熱時加熱尚欲求涼旨味涼方是往鶯心始息笑予竟日為
身惱 鶯還字可乎

有人惠扇二三子謝之以予詩也攬枯腸綴一絕云

人間六月覓風涼身未得涼心未涼価重千金君子賜常令巽々起
清涼

題茶筐

洗耳渙頭不飲牛笑他清潔污清流何如都老松濤味醒覺貧名眊
利眸

折梅寄故鄉

無語棋花趣未窮一枝芳信寄師翁同風千里新春意々緒万端在此中

永祖贊

重睡秋水碧伝法衲衣縉空手還鄉客超宗越格祖師

羅漢講式

靈山遺囑阿羅漢現住世間更莫疑三日已來弄筆墨儼然妙相露

威風儀誤成風乞正改之

湖樓雪景

終日寄憑卍字檻天然図画与人看西湖樓外雪花晚七十二峰削

玉寒

達祖忌

九年面壁眼如眉得体得皮惟自知一箇空棺余隻履至今徧界使人疑

北越淨広寺到着

張南出日花如雪越此來時雪似花拈得花兮拈得雪安居卜得彩

雲霞

同解制示衆

數旬無雨綠將枯一夜乘雷心似蘇各自東西看脚下門庭漫草有還無

題画梅

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

冰肌玉骨百花魁清節歲寒不雪摧我愛雪中高士臥誰言月下美
人來

成道忌 水仙和梅挿瓶獻故及于句

戴雪帶霜六白強冰肌玉骨見双清梅花志操水仙体和耀星光豁
眼睛

二祖慧可大師忌

斷臂高僧何敢疑利刀斬却正思惟庭前昨夜雪三尺莫是徹心徹
体時

三面大黒天贊

一人三面三面一人不三不一大黒天神

號証庵応智察禪客請

進修行業坐忘時一事未全涉思惟無學晨昏學還可善兼不善是
吾師

讚二八尊者

看過台嶺白雲色坐斷石橋流水声世出世間明了々無神通力太
廉生

贐祖門長老

行到遠江岐已窮回途不妨逐春風拳頭如有打爺力開展自看却
是空

勢州粥見妙泉寺結冬戶羅会啓建迎聖

白鳥鼎三の『天籟菴語録』について

現雨現晴妙色身小春何似仲冬新雖無澗水遮人意只恐人心自

沈倫

同戒会中法語午時為物外大量和尚

懷昔宗師大力量使吾今日奈承當非心非仏還非物々外風威死不亡

生死海辺接幾人未知大寂定中人喚時心更誰在仁義道中惟是人為前妙泉義道良応和尚

円寂定中移歩來山河高低好徘徊大仙才術只些子忍辱色心豈足債

波留村境永留春波及他邦麗似春結寒南天似花開何怪先春獨富春 施主波留村岡田氏

催老山林樹半凋中冬短景太無聊晒風洗雨皮膚脫幸有拈香真

實標

檀越不來設米湯米湯勿道味獻香為粥為飯豈何妨禪悅煑來為戒糧 藥石施主不來訣及于勺

一上金剛寶戒壇下來今晚旧時顏生々世々能如是坐仏不妨縱往還 完戒早晨

戒光無道出於口執捉運奔双脚手忘了自他唯此是不妨七日謾眷首 完戒午時

法喜心身禪悅腸打成一片戒香糧只堪喫咬不堪述喜助情和善

四郎

施主喜助善四郎故及于勺 隆道庵主相丁沢井先考松林院雪操義白居士月忌設齋要酬昊天岡極蔭庇余拈香遙供合掌說偈云曰

往年辛苦養凡心昨夜工夫為仏心從本已來不可得始甘過現未來心

不就仏求豈法求僧房眷頭拝三調展來一片炊巾上所礼人和能

札頭

生也春与死也秋憐世榮枯作喜憂幸有中村無住々開花落葉不休々 施主中村氏

三日不逢殊旧時勿道如同前夕姿眷回若倒若還起不弱仰山雪夫無絲絃而樂琴者獨有陶潛不干音律宜哉無知音如我門偈頌詩章亦文字而非文字語言而離語言而自絕音韵豈有格律之可論乎山僧哆々未了手裏管城子即日已離文字依何使予放毫光子一払子答曰是汝罪過不于我事傍有柱杖點頭曰將謂靠我於

獅兒

壁上山僧此時總不會衲被蒙頭休_ニ方機時一陣金風颯_ニ炉火

化情

茶銚忽發雀舌声山僧曰豈夫無知音池水猶笑而破顏風竹亦暗
点頭加旃柱杖弘子親知其趣茶銚也管城子也法住法位以同其

樂善哉沒絃琴

未曾少小愛蘭擎幸得一心師木叉爐上炷香回首燼林間落日転
眸斜

遠江瑞嶽山蓮覺寺円宗尊者啓建尸羅會因述賀悃云曰

天龍擁護阿蘭闍_{正好}人間師木叉贏得心蓮開覺者隨波逐浪立
生涯

迎聖

瑞嶽山林初灌憲天龍河水益添色夜來雨與半天晴本地風光藏
不得

開山安雌全雄大和尚二百五十回忌

三衣一鉢翼生涯雌伏雄飛各有時留与林間山栖木至令爭育幾
離兒

業風吹盡未曾休三月暮春麥熟秋有機波瀾起平地幸無人作陸

沈愁此日卒風驚覺及于句

聞思修入戶羅場風歇雨晴眼界清雲山掛出參同契寶鏡高懸旭

日明

瑞嶺浮雲卷又舒

松林春雨細義疎可憐人世長安閑我此法延常晏如

脫世網來三日強浮沈同結白鷗盟隨波逐浪生涯底仮性海中游

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

未曾少小愛蘭擎幸得一心師木叉爐上炷香回首燼林間落日転
眸斜

忙似浮雲流水忙刻期七日正中央三帰与三十禁戒咬嚼初知一
味糧

法雨普施慈愍腸窓雲偏覆愛憐情等霧二木兼三草何況大莖又
小莖嘆為風為雨度生說三十二庵一眼睛此日風雨午時誦普門
品故及于勺

風吹麰麥綠波起雨打菜花黃蝶飛見聞触處有風味知境忘時絕
是非

何管天龍濁與清有時洗脚濯綏情隨流轉舶度生妙斜張錦帆十分晴

曉風有力掛雲霧旭日放光消雨露返照從來罪業空等閑脫却娘
生袴

高木村中抽綠茅中洲滿地撒黃花光明遍照十方界入出去去同
一家完戒

代簡寄聚石老兄

一門五兄弟欠二只余三各自在方外無情與孰談

祝源林首座於河窪福昌院

不同彫琢喪斯文豈等放光驚衆群勿怪河窪藍水志媚波自有破

白鳥鼎三の『天籟庵語錄』について

顔紋 志一成去未知是非焉

福昌院初転法輪

寄身湘水碧河窪救濟心淵輕世華撓掉何須接人手錦帆換得一
袈裟

精魂

次風祭山主示米頭韻

不囂功業不修禪著眼一双々脚辺信施如能莫拋撒未春粒々放
光円

示人

元治元甲子夏助化於福王禪刹日有駿府顯光堂頭竜文大
和尚為法不啻特來左袒樹法施更書打給而以增一会光榮
偶請余題詩於摺扇面因賦之兼伸謝致云曰

骨肉尚施菩薩腸知恩只要報恩光一天四海蒲團上方好抛身捨
命牀

未逢先識過時髦特感扶人志氣豪恰似魯陽返斜照光輝再放在

得禪首座分庭韻楚於常光床之三字申賀
頭陀心術字尋常豈異人乎即飲光坐亦得焉行亦得出身脫體一
禪床

揮毫
超山涉水不辭勞況亦袒肩扶堅施為法不堅垂隻手禪林光彩出
揮毫

常光寺琴隨大和尚初転法輪用前韻表賀悃云

福王堂頭伝芳大和尚今夏立法於因伸賀
大井天竜二水間腕頭獨許擰狂瀾五十三駅海東道免得遠江行
路灘

神通應世是家常吐握隨機觀化光室中雖狹運心大容得衆賓多
許床

次二三子喜雨韻礎

衣角首座分半簿於風祭山

旱天滂雨亂蛙躁鼓吹應催田父鬧吟筆欲耕吾又農村歌勿怪放
襟懷

投袈裟角入空門地獄天堂搏脚跟護雨祭風清世計一衣尚耐覆
乾坤

十六善神贊

豹變南山霞鵬搏北海風不因般若力誰得解真空
風祭山福王寺尸羅會啓建夜來風雨禺中忽作晴故及于句

周國長老罷參未了賦詩而証之今夏偶探枯腸聊申懷以償
旧債云
兼全名實道為藩尊似周朝金鼎尊三學進修何敢闕克家興國旧

風祭山林以雨鳴福王法食得晴成因憐古仏大威力為雨為晴一

化城 食字令人疑着成会可乎

不知 施主南島村河島氏及子句

自縛世人名利貪々婪抽解入精藍上堂多是空諸有豈啻衆中一
二三

天界晴時胸宇晴更無雲霧障雙睛半規斜日在西嶺返照增輝一
化城

一洗旧時面孔來耳聞眼見絕塵埃塵埃絕處更湔滌始識全身是
脫胎

雨余風色太多情有暖有寒時變更新竹猶增脫皮翠古溪却減鼓
琴声

夏天暮雨灑祇林老木新芽翠色深誰識我家閑富貴梅叢々裡綴
黃金

梅果熟時盧橘肥遇雨逢晴結實枝天公本是無私化愛得隨機又
一奇

於食等時於法等稱名作禮又看經說時默矣默時說所禮影因能
禮形

夏昼雖長已夕曛驚眼風雨太殷懃松琴集得黑甜味雀舌煎來彈
舌聞

言外玄機參得易世間宿習遣除難客中作客心憐客啼血杜鵑徹
肺肝

世出世間抖擻來杖瓶到處好生涯村号南島姓河島不是到家人

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

霖雨忽晴為夏天薰風着力拏雲烟捨身懺悔未曾作殿閣生涼得
快然

心穩義皇向上前身居生仏未崩先了無周蝶入昏夢何倩松風驚
午眠

見色聞聲色即空明心悟道馬牛風上無諸仏下無我血脈從何得
貫通

人々具有一心戒顯露称名兼礼拜困則就眠飢則飯放光普照塵
沙界

七日戒延半逢雨可知井露溢今浦一人曾未沾唇皮尽地悉忘饑
渴苦

福王二世命泉義竜大和尚三百五十季十九世盛山活榮大
和尚二十三年獻供

隔年三百余年強同志二師得守成殺活自由鋒末露竜泉劍下見
盛榮 二大和尚一人先出而出則為人不出則不為人也一人

後出而出則為人不出則為人也且道至竟有第二人麼或容七
十余雲衲霞袂或投三百強爺嬢男女未曾為狹豈何云寬可謂與
世間同度兼虛空等量恁麼端的奈如得瞻仰毫光喎数千竿竹秀
風祭南北禪心歸福王

有雪航維那代簡寄相之勝興作因示予々次韻同問候云

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

汲水採薪不忽諸提斤慕古豈曾疎嗟師寄跡大山大々字応須心上書

対竹林有感 安居于福王夏日

昏曉風鳴雨又鳴茎斜茎曲百商量一雙々竹日相對多福清談在福王

晒蠹書

典墳内外許多書強半未繙付蠹魚偶敝赫隆先欲晒慚吾腹笥一無儲

福王殿上龜育仙齡大和尚寿像

福智莊嚴師法王大仙林下寄禪牀手中拈軸龜毛弘誰怪万年保壽量 靠杖看々祖肩意群機撫育道人腸

耳林鈔序

夫道猶在於人而求於文字者惑也而復廢背文字不求於茲者亦

復惑之者也往古來今此土西天不遠海岳之路往來畏塗嶮路者

時有人師也風外禪師堅法旆於三之香積之東奧西筑霞袂雲衫

歷過嶮路而投焉侵凌風波而漸到之焉只管為道而豈其為文字

乎余与洞仙閔公同參安居之晨參暮請師示曰高祖伝東國師入宋帰朝之古一則碧巖錄徹夜而騰写之了然以円悟老人破關繫

節錄以目之者祖意在于破闕而要教澆未吾儕破文字闕而以得宗乘自在歟粉骨碎身不足酬於是三五輩結党每值提唱之寸言

尺語以錄於紙衣休沐之日輯集之而以計魯魚所以是鈔之自勿出焉也希後人仮瓦子而敲月下門離文言而破生死闕則一句未發以前定有報祖恩亦酌師德之分今夏禪人騰写以示余証之日他日偏僻之域夫自遇偕闇証禪師叩蒙冬瓜卵子乎如以不立文字自研究之則剗却証拠進修之一路看閱照心退承之机案雖是在市城而居深山雖坐孤峰不出幽谷者只箇是乎

城州竜雲寺遠州全久院駿州永明寺三刹歷住大英雄道大和尚真影讚辭

無相光中現法身一円水上見精神太源十五世孫正脈掬全派天桂五世之孫遺香薰幾人寺全久々風因守律永明々德在親民大庵通和尚号大庵是本師也化道不能計三処住山聯認塵松山影浸蛭池碧勿謂飛龍雲際真右蛭池村松龍山并城之竜雲住山及于句 応壽正大円力生請

蕈瓢贊

曾逢顏子愛還被許由憎若是不成熟何為惹愛憎

与玉泉禪人

翻身乍入碧雲閑不許無心居此山一洗大谿頑石耳帰来方好湿人間

龍天護法神

龍衆天神及白山為三称一太愚頑護心護法親觀照念仏念僧豈等閑

題養老瀑泉図

養老至誠專感息一心即是一乾坤勿疑瀑水變為酒堪仰聖皇曆
改元

十六尊者

本無一物作家珍絕有纖毫便是塵亦得天台法空座雲為衣体月
精神

十六善神

清平道業忘身佚樂生涯絕倫只管看經作禮那知護法安人

勅賜大明禪師円通開祖誓海義本大和尚征忌八月八日

不啻金風玉露清起雲施雨朝雨至午天晴大慈腸幸因八月殘炎甚始識古

松親蔭涼入流一々円通境見色聞声是化城

睡山茅桃源高和尚一秋忌八月十二日

浪華江畔脫塵泥神跡峰頭拋杖黎行履而今在何處夕陽斜掛柳
城西 風斤劉鼻不驚動月下放開香木犀

次中秋無月韻

廣寒宮裡尚生憂況復蓬萊於古丘聽雨南樓空閉戶憶君一夜似
三秋

埋月吟樓秋雨濃滴声々裡數更鐘周生若有梯雲術為要推開雲
霧封

木全氏德翁英寿上座真 甲子八月廿五日逝

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

応是大悲示現人隨塵混俗志懷仁々心憐世積功善產業克家陽
德新七十八年閑活計秋冬春夏一精神度生宣說聞否手掐念珠
念々親

白鳥開祖忌 明谷義老大禪師退夜

明暗雙々眼皮谷神不死是生涯義心一片今猶在光風可仰旧
容儀 禅味秋深殘兼露師資同賞展霜眉

同獻粥

不同忘算聽談論豈等仮牀憩夢魂推却呂翁一枕枕老秋風味更
何言

同午時

慈心応是握為拳展作掌來益覆緣何計而今屬吾手焚成片々一
爐烟

白鳥十六世叢林開闢俯貫雄道大禪師尊像成点眼 元治
甲子十月二十七日預修之

未曾点得一毫釁日月雙懸双眼睛結為霜還解為露始知慈照太
分明

同禹中上供

花想之今月想之忽忘花謝月沈時拈心香得拈光得見聞堪感大
慈悲 殘葉帶霜小春晚凜然殊覺老生涯

大黒天

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

入神帰仏善結福縁挹仁与寿大黒尊天

雖小菴師翁二十七年

元治元甲子冬
於萬松寺

一蒲團上一伽藍一任地呼雖小菴々主拳頭有麼否出生入死打

痴頑

題茶室壁

不論他富貴何管我疎親滿室籠烟霧一爐煮玉塵

寒菊

詩人富貴銀千粺僧舍榮華金滿疇五柳先生知又麼歲寒留得菊

花秋

偏愛三秋黃菊花々殘誰道更無花淵明去後見時節撫力雪霜唯
此花

保福仙洲和尚壽像

應福昌清節長老請

相見別峰古喜賊德雲開展一双眉茫々宇宙人無數計有此資看
此師

香爐銘

無量性欲一捻香烟薰他薰自感鬼感神

呈一心寺主

菊残尚有帶霜枝楓散豈無披錦姿杜牧認來閑模樣淵明歸去好
思惟

次谷口大人試毫韻

歲月公然了未私今年心勝去年夷詩毫忘老費功曉硯水迎春解
凍時

首夏即興

近來無意倚爐邊窓戶放開催午眠春草池塘夢初覺薰風有味夕

陽天

中秋無月

中秋唯有月雷雨到三更電影落岩下猶疑明月生
浮雲覆秋空夜深影滿地因思多病身也未可自棄

見月寄人

道德之余散作文雕虫篆刻莫勞君試看河漢團圓影一夜一今添
一今

宣翁烹茶

收拾林間霜後紅煮茶招我意尤濃坐看不話山窓靜万岳松風一
鼎中

帰雁

天外一声山水長幾回北望背斜陽憑君欲寄數行字家在城南深
艸鄉

源平桃

花以源平紅白旛一枝今色鬪嬋妍人間万事亦如此鬪觸相爭蝶
角天

奏公建

佳客不来年亦窮迎春一笑恨成空稻山艸阜同風日雪解隣峰路

自通

偶作

稻荷山南竹葉山三峰樹色入窓閑雲來雲去何時尽稻荷山南竹葉山

高臥幽窓眼絕塵安然一睡度三春幻夢法界吾神力厭倒應真五百人

雪

天雨曼陀奪彩霞濱紛乳墜白雲涯我家靈瑞無人識枯木寒巖總看花
曉來積雪四檐堆橋木纏衣心若灰堪笑天公不知我漫將茅屋化瑤台

和茶詩

乳至醸醇味正濃酩蘇何足醒昏蒙玉川不識玉泉水唯有車溪揚此風

雲

疑成冰雪散成霖天地之間亘古今律凡奇峰有時出神公如此本無心

燈影

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

繁密相對不看人瓶裏梅花画得新壁上有吾禪里客撻無面目是全真

菊

一種秋菊出世塵獨存晚節伴清貧籬邊莫待繁華客隱逸花宜隱逸人

夜雨

夜雨燈前獨照心縱染世上少知音他生若得霑枯木久旱何必伝說霖

次探梅韻

四山零落歲將闌林下更無紅葉殘有友隔牆梅一樹為花何怕逼身寒

煮茶今韻得閑字

竹院誰云一日間此君常伴可清閑酒盃拋後更何似滿耳松風拋醉顏

今茲元治甲子雪安居適請嵩岳上座充於雲堂首版欽抃之因撚霜鬚探枯腸以伸丹悃云

淡薄交情覺最親要機何倣破顏顰半間今与有誰識手払石苔當錦茵

讀書愛日長

不比聚螢秋夜明豈同映雪九冬精閱書未半宰余眼睡去醒来日

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

漸傾

次寓藤森了玄院韻

幸以無能離市寰葛藤森裡掩玄閨鶯花一任遮聞見不發吟心竟日閑

林泉寺偶意

老松樹下坐安禪天籟為庵別有天声色外邊何所作黑甜風味林泉

了玄開山廿三年乙丑三月退夜獻湯

溫然和氣至今存二十三春三月昏為雨為晴眼前事見聞無一不慈恩

同獻粥 時雷雨及于旬

曉天雷雨勵研姿旭日情空溫瀾眉躡躅滿山松四面翠江遮眼庵供時

同午時

了々々時無可了玄々々處有何玄近傍不得庵三昧人道被遮風雨天

十六羅漢贊

浮雲流水影西東一月千江生死躬喚作應供遲八刻經行坐臥大神通

拈法衣語

似竜護一珠如鳥生双翅霧露与雲霞不妨肩上被

小參謝語地震後故及于句

天然推倒好伽藍不意安居寢食安真箇轉身時節子回看展鉢又開單

樹芳上座初七日香語

透過人間業識堆忽然憐汝入輪回法門有味禪甘露換得陽關那一盃

高頭寺大会滿散上堂

茲香雖有翠竹青松之節豈同春蘭秋菊之香拈來熱向爐中端為祝延 今上——普天之下滅除煩惱焰率土之浜澍甘露法雨祖門杻械此中有积然解脱庵衲僧否 問答不錄 謝語愛画葉公已失真濫等南郭又遁貧山僧今日自庵此幸為清平世界人雖然如此露柱有心還笑我燈籠無耳得相親

閔貞寺開山忌退夜香語

五十春光已挽回寂光淨裡去還來兒孫縱在獻花志十分芳唇尚未開

偶作

枯木竜吟聞者誰青山獨許白雲知何須頑石叨春首肯路通時八刻遲

涅槃忌

為憐澆末小廝兒忘醜婆心真大慈扶律談常經一卷痛腸悲淚与

人知

應是從冥還入冥幸為末法比丘形松風竹月今猶古翻訳將來遺

教經 春風徹応寒威切肌可鏤乎骨可銘

拈竹篦 金剛輕賤話拈語

世法仏法這箇一經卷終日轉之未曾転末了転之無時不転之転，
不転只此竹篦子請諸大衆不輪長短不議是非試一着來

其謝語

如予先世罪業狂犯此座為墮惡道白汗通身必被失笑那知輕賤
即為消滅慈悲歡喜

摩經不二門話 拿竹篦

如夫道是々無可是道非々無可非是非不到地只這竹篦子依然
三尺強雖然今日把住也在我放行也在我旦道喚作什麼不論是
非不拘長短打開不二門試放光來

同謝語

野僧欲學文字未得之況於辨道平說也不得默也不得然忝蒙師

命之重曲徒勞心力耳任他謗霜葉応須枯木花

祝虎岳山龍源寺桂芳大和尚初転法輪安居於百余衆故及

于句

不唯伏虎制神龍奪熱与涼人世雄九夏一千余指衆白雲牀上睡

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

清風

楊柳觀音像

楊柳指頭湔甘露香雲脚下發紅蓮大悲願海深多少逆浪須波濟
世緣

龍源廿四世神立開祖英田俊國和尚真影

宇宙乾坤際特看唯是師白弘伝持精神立只這是烏藤靠倒頤養
円曾不顧俯以察厥容儀皮履脫却仰之觀其形影衣納塔披席岳
山前盤磚古降龍池畔屈伸時葉公鐘愛勿相似高掛法堂供養之

上本宮山途上

仰望本宮猶半山俯看下界又千般何図父母所生眼見盡遠江七
十灘

邇看東海道如弦遐望南溟浪接天勿怪山僧見量小三河遠嶺一
眸前

次蚊雷韻

十万軍声作隊來欲交利觜一銜枚幃中休運張良計如奈貪岳勢

如雷

夏天昏曉屢懼之雖颶薰烟稍一時誰以蚊雷尖觜利幸為刺股破

眠錐

林泉寺有感

紅黃柿葉曬林泉憶古先師振熱拳忘醜婆心今猶在憐兒留与止

白鳥鼎三の『天籟庵語錄』について

啼錢

二八羅漢讚詞

台嶺白雲觀聚散石橋流水弄浸漫偶諧三昧王三昧遊戲世間出世間

活計自豐弘法才精神何曝報恩腮石橋拋杖化竜去台嶺拳拳仕虎來一念回光知殺賊寸心返照笑禳災

梅雨

疎松密竹長新芽人世莫嫌雲雨遮幸有窓梅綴金果我家富貴更

何加

石頭鉗斧住山話拈則

書音不達信何通提斧住山是古風退後進前看脚下誰妨転步自西東

同拈竹箆

古人以是真住南岳今人以是狂上法堂比主丈則不足較扇子則有余其有余与不足補之不得截之不得世法尚然況於仏法乎今日法戰場中不論是非長短方好背觸機前驗点作家這裡有不落二三不顧危亡之漢第一機上試開口來

同謝語

無舌鼻孔為他而通有人耳根為自而聞眉毛橫眼上吾亦便似他唇舌震鼻下他自是勝吾乎雖然吾祖伝東國師曰有顧自如他之

小人有見他如自君子希各自掬其末流如夫有人根利鈍當応道無南北人況分好惡是非乎請以是恕之則何幸加之乎叛顏三復述無言矣

祝分延 代人

選官選仏任他選清淨海中齊祖肩諸有空來真一座機輪轉去寒今延

七夕有感賦与貞道沙弥

禦寒衣衲療飢浪聞道牽牛織女恩忰向銀河燒香禮此中何怪赤心存

三師真影現于一円相上中央本師拈払子右授業師左法幢師同共持如意

有此師今有此資相逢贖面不相知一円光上三身現無是如來授受時喫三衣一払雙如意證契即通知是誰

上堂拈香

此一辨香不自天降不自地苗寧蒙雨露多摧風霜今日結制令晨恭熱向金爐端為祝延今上皇帝聖壽万歳々々々々々々歲陞下仰冀五幾七通同服義皇向上之化風四海八蠻与蒙堯舜無為之

德沢

這香鐵錫草鞋幾歷春秋減之不減螢窓雪案屢触見聞增而非增貴々於不起一念之須弥山賤々于商量仏法之盧陵米不免今日

拈轉将来親投爐內熏翻 先師大和尚禪師半片鼻孔謹希尽未

來際無明山上長挑燈億万期年煩惱海中承作船筏

永祖忘
寶泉派脈掬當糜瀨戶陶鈴吹慰飢貧道雖無野芹戲斯心唯有祖師知

養円寺俊英和尚肖像

乾坤宇宙更是阿誰荷担斯道只有此師又手当胸相正身端坐儀
提斧養円応氣把慈接俊明機

龍源寺桂芳和尚本師像

白雲影裡忽翻身五慾塵中好葆真虎岳拭風新模樣龍源起浪旧
精神 且道藏身露影逢場作戲底令三上座如奈指陳 逢晴逢雨手翻覆示熱示涼脚屈申

龍源寺先住忘

降龍池浪清而濁隱虎洞雲晴又陰夏山雨過奇峰露秋信未催夾
氣深 如上者禪師隨波逐浪王三昧奈何得拜師大心

題荒岬骸骨傍有幻婦携花水図

恩愛盡從貧處斷世情皆向有錢家痛腸淚是草頭露孝婦懷為心

上花

憐世心影厭世情知恩淚出報恩腸嗟峨野曉檀林暮花影月光猶

題竹

剉香 起夕心彰誤成心影乞回改之

掃除人世熱煩埃秋月玲瓏要拭之如識此君為蓋友虛心清節是

吾師

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

直齊
脫落身心古身心脫落今有賓雖有主淺無亦無深喫仏界魔鄉留
不止越山字水孰追尋

又獻粥 夜雨及于句

至今鷄五更鳴自吾憐夜雨声風疾熱消胸次爽暎鐘響罷室中明
奈得拜應供之脫裡雖向家鄉有移步空拳空手向誰呈

寶泉五世俊峰智賢大和尚廿三年

炎涼二十有三年機息于不入出緣俊逸機鋒今尚在日輪當午影
嬪娟

初秋三五賞月

賞月無如今夜月秋風払尽夏天熱不妨冷徹葛衣衫欲向中庭踏
霜雪

真田天德寺_世^{廿九}即室寬孝和尚一秋忌_{四月}

背却世間出世間何好遷化去他方天然令德不藏得凜々翔風露
作霜

少林高祖忘

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

不唯吹火蹕爐灰又作起揚小法師應化現身千百億九年一默活

因來春首覺了看經發硎利刃却勝庖丁
寿

生涯 旦道應供今日如奈礼大人慈悲之真儀 白雲江樹一蒲

居士退家閑居賦之以贈二絕 其一

上莫道少林旧面皮

六祖大師像

元是嶺南無仞性工夫春米奉師命單伝六代法衣盂如比碓頭重

曾統箕裘業克齊祖父家成名遂功了閑養老生涯
其二 未触勤絕更賦一首以鍼老膚耳

却輕

偶作

前三々与後三々凡聖同居天籟庵不許普賢來入室文殊何識黑

賀首座 代人

甜井 蒼飛不好戾於天誰怪龍魚躍入淵欲問修功兼証德半簷榻上笑

嫣然

甘露門 楓錦如花西又東艷春何似小春濃板橋霜与草頭露旭日忽消風
味融

真芳現董牛公大宗師整傾頽之志一字仏殿不日而落成之
煥然於目前余感嘆之余綴為一絕以申祝情云曰
塵々刹界阿蘭嬾刻意何妨更立成古仏放光新仏殿大神通力化

群生

天德尸羅會 中冬六日啓建七日快晴

茎曲茎斜一双々多福庵前伴北窓最愛以君貞節志歲寒不為雪
霜降

真芳寺主需書三軸因以福祿壽為題賦三絕而應法鑑云
看々天德大藍伽直得煥然此改觀一人發信帰源力況摸十虛空

界寬

風吹林葉見山胎露結為霜何所為好箇転身好時節視聽一々是

吾師 無日不為却又無為葛天生計除我更誰

福 祿

松花荷葉木寒草根地呈地味天送天浪

憐他忘自大悲腸豈計降臨於此場勿道應供無一物赤心片々不

曾藏

片岡村芹沢氏設斎

芹沢香根存不存向他徒勿托芳魂金目片岡一川隔遮莫漱流洗

耳根

何管曉天曇与晴寒威減却得溫光試看甘露法淡味隨分安身一

日糧

天徳寺殿國華長運大居士称真田大明神文設供故及十句

鋒鉗区當石橋生鐵鑄成忠義心為露為霜不曾好精神貫日古來今岑

寒凜應須一半加仲冬何意却溫和稱名禮讚妙功力天帝無私慰

我那

前心離慾用心專後念看經即念円七日進修來去就尋思不許擬情緣

黎明一雨太淒涼況復半天却作晴尸羅場裡法甘露為晴為雨腸

膨脹

礼拝看經幾飽來晨昏一七日生涯汝如是矣我如是心仏衆生知是誰

無去來而示去來誰知諸仏大慈悲人々試將面門見眉低分明双眼皮

松岩寺開祖如幻実悟大和尚征忘

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

欲接世間幻化人化身幻出本来身進步焚香退而禮博山爐上見精神此中更無主々如奈有賓々寒溫動靜親回看日然風吹

転法輪

松岩十九世卅三稔忌同廿世三春忘

前董師兼後董資師資同結一双眉風收落日將西沈無是回光返照時

大智寺開山月照光大和尚忘

大智行因力耦耕耳孫拱手慶西成至今筆舌都無用眠穩豐田一化城一旦道不因送迎奈得胆礼毫光白雲遍覆雪耶雨一任外

人強測量

禪介德辨首座百箇日忌

応是全心竭孝心還先師父甚胸襟人天苦界及安養要去驗前途淺深古來心一片今古罷追尋如雪似霜寒夜月影移一百日

光陰

因事

省自雖無徐晦肺曾好酒人較他唯有沈云脾古人人間豈啼於三樂味在其中榮啓期曾云有三樂

因事示人

古人教育古今人招得令人奉古人如見松無古今色應知頑石点

頭真

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

有人賦得霜葉紅於二月花塵清韻以酌

護真

無欺花意却欺花今古幾停騷客車因我拙詩包愧否夕陽殊見板

顏加

二三子賦雪竹余也賦雪屋而竹為韻

略約石橋要度生為階為阪又何妨超過郝痴閑計始識菩提円覺
場老

銀屋

題竹蘭二君図

晋阮籍青眼而見交友於竹林
白眼而見俗於世上云

工夫漸熟黑甜余今日初知如往初六祖解云無一物少林勿道九年儲

伴聖伴賢忘世安

濁酒称賢清酒
称望本於竹

愛芳愛節結交難希將青白阮君眼勿

看吾家竹与蘭

雪竹療韻

祖意西來伝日東進前退後好研窮寵參即是久參始說默達時宗
亦通

琅玕

歲寒未了換容顏拏月拭霜是肺肝休怪此君貞節志易為化作白
琅玕

慶應二年龍舍丙寅客中迎春 時年六十歲

聞說母胎早度來下山今日接阿誰心光忽被星光奪墮落往年双
眼眉

春帰

寒山展一軸

太公望不把釣竿圖 為山田道齋主
避身渭水綸垂事持節天門資轉釣多謝先生論先後被人制得制

人々

巖根写蘭与竹圖

巖下芬蘭与綠筠愛看三友服交親松兄梅弟不同在貞節芳心足

雖是虛空掃空不妨胸宇起清風共光千里一輪月和簫笑他忘己

拾得抛掃簫而仰賞月圖

隻軸久伝如是經展來何意說無聲可憐護惜寒山月失却円光一
半明

躬要

地蔵願王尊像

聖心賢腹大己貴尊安人愍世鑊護荒魂
趙州十二時話

忘自通宵休四肢憐他竟日展雙眉冬天寒与夏天熱消過僧房十

二時

寂而常照大光明々似乾坤日月明明暗界中留不止機輪々轉是
支竺日東為一庵隨宜方便大仙心信衣偏袒右肩手坐了法空要
保任 為養國現董德須和尚

建宗寺設斎 五日

梅弟松兄交此君歲寒清節各超群古今不變唯三友足囑兒孫師
見聞

間島村分中島鄉普傾法味療枯腸先秋夏菊開含露過雨綠舞秀
葉粧

養國十八世竺庵宜仙和尚像

建宗寺戒會

達祖乘一葦手携隻履像
身乘一葦是生涯隻履手携何所為骨體完皮分与了憐師回首立
多時

東西攝取戶羅場何處不董於此香晚來忽示風濤起自洗見聞松
葉粧

逢阻風雨有感

風波一代度生航日月九年面避釭誰謂南天皇太子從來伝得仏
心宗嘆只看携履去乘葦誰識回頭還忴供

幽閑幸閱法華經風雨豈空阻此行一日流光猶半日天龍河上了
浮生

晋院法語 代人

山門

普天匠地解脱門開諸人要入試隨我來

仏殿

天德孝公禪師今茲乙丑冬結制安衆余也加一數因賦之申

賀

不運籌於幃幄中丈方拱默展宗風孰知天德無為化自就將軍不
戰功

文殊是我普賢惟伊中間端坐知矣是誰當成仏已成仏得便宜

落便宜

伽藍

午頭天王

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について

方円隨器感仰忚人不違仏勅好伽藍神

祖堂

志氣毒無害道心雪不摧少林風蕭颯熊耳自誹徊

開山

吹滅不曾滅室中那一燈惠光懸日月照徹幾層々

拋室

鳶飛到天魚躍潛淵山僧無怪這裡安眠

小參

這一辨香熱向寶爐端為祝延今上皇帝……陛下仰冀明德深於海壽量高似山

釣語

行棒下喝非吾事作摩生道隨處作主底消息

迺云

有時塵中能作主有時化外自來賓拳足下足鳥道玄路旦道大用現前不存軌則底妙用法住法位世間相當住

謝詞

恭以本山堂頭大和尚隣峰宗匠同門耆宿山門兩序四來兄弟担肩扶吾厚恩曷尽

拈則

記得僧問洞山如何是仏山云麻三斤大小洞山開口看胆若有人

雪山埋雪 禪定脫禪 明星一見 胸宇嬋妍 上山步与下山

問山僧劈口便打何故各自眉毛眼上橫伏以衆慈久立珍重

綠枝折

回首天涯消息通何論雁字水中蹤知音不在青山外恐向螢窓雪

案逢

端午

儒家不許菖蒲酒清渴醉醒何自負可憐江畔石榴花紅顏而混人

風否

拈竹箆

地是蓬萊島朝看霞彩嵐光無邊之風色寺是法持寺夕聽鷄鳴狗吠不斷之法音正恁麼時節野衲說箇什麼縱令說玄談妙却免竹箆子之笑雖然依例今日不可無一言半語諸人者撥開自己胸襟不墮思惟試通一線路來開口師着語作麼

又

若人識得竹箆子東壁胡蘆子暗點頭將又拈點破蒲團南海波斯開口笑會中若有会應漢試唱和看

謝語

幽谷松嶺上蘭較其末恰相同下愚野衲上智大德無論其根庭則幸甚伏以謝悃難尽

黃檗高泉画出山像贊

歩 同歩何為袒右肩

天籟老人墨蹟写

河漢霜白秋将暮素影西流不少住可憐天涯無限光無宿草頭一
点露

孤山雪後覓春時吟自南枝至北枝標格依然還不俗若非吾友是
吾師

積雪推中碧水浜此花特是見精神非經多少歲寒苦即得先天

下春

杖藜緩步思悠々望盡青山坐水流來往風塵多少客桃花夾路不

回頭

兩送新荷歲風生高竹涼鳥語入禪味魚遊悟世總

新刊紹介

川口高風對校・解題

白鳥鼎三本

洞上二世光明藏三昧 定価一、〇〇〇円

大本山永平寺刊

白鳥鼎三の『天籟菴語錄』について